原著

サンフランシスコの新一世の変容
― 長期滞在の日本人男性の事例からの考察 ―

田　中　真奈美[1)]

Changes of the Issues in Cultural Adaptation by Newcomers of Japanese Descent in San Francisco: From the Narrative of Japanese Men with Long-Term Residence

Manami Tanaka

要　約

1866年に江戸幕府が第１号のパスポートを発行し、日本人の海外渡航が許可された。1866年には、ハワイやグアムへ集団移住が行われ、その後多くの日本人がアメリカ合衆国本土の日系人移民の玄関口であったサンフランシスコに移住した。1960年代以降に移住した日本人は新一世と呼ばれ、戦前の一世とは違う特徴がある。2000年代になり、新一世の背景も多様化してきている。

新一世の特徴の変化を明らかにすることにより、多文化共生の示唆が得られると考え、聞き取り調査を行った。本研究は、2007年に行った５人の長期滞在の日本人女性の聞き取り調査、2015年の長期滞在の日本人男性の調査、2017年の長期滞在の日本人女性４人の調査の継続であり、その結果と比較し、考察を行った。以前の調査と一致した点は、渡米前に既に自我が確立されていたこと、海外生活に適応するために活動的な自己形成がされたこと、次世代への日本語・日本文化教育の考え方、日本人としての民族アイデンティティを自覚したことであった。

キーワード：新一世の特徴、日本語・日本文化教育、民族アイデンティティ

1．はじめに

日本人の海外移住が本格的に再開したのは、全米日系人博物館（2001）によると、1866年に江戸幕府が長年禁止していた海外渡航を許可した時からであった。「御免之印章」と呼ばれたパスポートを取得し、海外へ渡航したのが始まりである。その後、元年者と呼ばれるハワイへの集団移民が行われ、その後も多くの日本人がアメリカ合衆国本土やハワイへ移住することになる。第二次世界大戦以前に移民した一世とその子孫から、新一世と呼ばれる1960年代以降に移民した人々とその子孫まで、現在でも多くの日系人・日本人がアメリカ合衆国の各地で地域コミュニティの一員として、アメリカ文化に適応しながら生活している。

1860年代初頭に最初の日本人が渡米したサンフランシスコは、アメリカの中で最も古い日系コミュニティが形成された日系人にとって歴史的に関わりの

1）田中真奈美　　東京未来大学モチベーション行動科学部（Tokyo Future University） tanaka-manami@tokyomirai.jp

深い場所である。全米に現存する３つのうちの１つのジャパンタウンが、サンフランシスコ・ジャパンタウンである。また、全米日系市民協会（Japanese American Citizens League）の本部があるため、日系人にとって中心的な場所である。

本研究の調査対象地であるサンフランシスコ近郊には、日系人だけでなく、長期滞在の日本人も多く在住している。外務省の海外在留邦人数調査統計（2022）によると、サンフランシスコは、在留邦人数が11番目に多い都市で、20,089人が滞在しており、前年度から、1.6％増加している。異文化であるアメリカ文化・社会に適応しながら、集住地区を中心に日本人コミュニティを形成し、日本文化を保持しながら、生活している。

サンフランシスコ近郊では、長期滞在の日本人の特徴が変化してきていると言われている。当該地域での異文化適応の課題を明らかにすることは、多くの示唆が得られ、意義があると考える。新一世の特徴や異文化適応の過程がどのように変化しているのかを明らかにすることを目的に、長期滞在者の40代の男性３人にライフヒストリー法による聞き取り調査を行った。

２．ライフヒストリーやアイデンティティに関する先行研究

2.1　ライフヒストリー研究

ライフヒストリー法を使用し、日系人や長期滞在者を調査した先行研究は数多くある。日系一世を調査した研究として、上田（1997）のハワイの漁業界で活躍した喜多氏の調査がある。上田（1997）の調査から、「日本人移民の一世が異郷の地ハワイへ至り、慣れない土地での苦難の生活に打ち勝って現在のハワイでの安定した生活を確立した足跡を、あるいは漁業でみるならば、ハワイ漁業の基礎を築いた足跡を記録にとどめ、これからの若いハワイ日系人や日本人に知ってもらい、その生き方に役立ててほしい」という日系一世の次世代への思いが明らかになった。この一世の考えは、筆者の以前の研究である田中（2014b）他から、ハワイだけでなく、アメリカ合衆国本土の日系人にも共通している。

また、喜多氏は、晩年、多数の日系団体の役員を務め、日系社会のために尽力した。このことは、田中（2014b）と田中（2021）の研究結果と一致しており、長年自身の生活を支えてくれたハワイの日系社会に恩返しをしたいというコミュニティへの気持ちの表れであることがわかる。

ハワイ生まれの日系二世の研究として、ハワイ・カウアイ島の日系二世に聞き取り調査を1999年から長期に亘って行った山中・藤井（2002）の調査がある。その結果から、サトウキビ・プランテーションでの労働の大変さ、一世、二世、三世の世代間の相違や確執、太平洋戦争時の経験、一世の日本への望郷の思い等が明らかになった。村上（2019）も、ハワイ生まれの日系人２人にライフヒストリー法による聞き取り調査を行っている。日系人として大切にしていること、ハワイ日系社会の文化や日本文化、ハワイ日系社会の特徴や最近の変化、今後の日系社会等について分析・考察している。

アメリカ合衆国本土の長期滞在者の研究もある。ライフヒストリー法を使用した研究として、田中（2014b）は、長期滞在の60代の女性５人への聞き取り調査を行った。その結果、長期滞在の女性は日本にいた頃から既に自我が確立しており、独立心が強いことがわかった。長期の海外生活と異文化適応の過程を通して、アメリカ社会に適応するように元来持っていた自立的な性格が強調され、変化していったことを明らかにした。また、田中（2021）は、2015年に60代の長期滞在の男性１人に聞き取り調査を実施し、日本にいた時からアメリカ合衆国を身近に感じており、元来持っていた外交的な性格が、アメリカ生活を通して、更に強調され、他者に対して開放的になっていったことを明らかにした。国際結婚をした長期滞在の40代の女性４人への聞き取り調査から田中（2022）は、次世代へ日本語と日本文化を継承していきたいという思い、日本人としての民族アイデンティティの意識の変化等を明らかにし

た。

日系二世のカナダ人の研究として、カーク（2020）は、ライフヒストリー法を用いて、松田氏を調査した。第二次世界大戦後、カナダから追放されて日本に移住する選択をした日系カナダ人の歴史について考察している。

日本在住の日系人の調査もある。加藤（2019）は、群馬県大泉町に居住または大泉町で学齢期を過ごした経歴のある日系南米人にライフヒストリー法を用いて調査した。ホスト社会の取り組みや居住環境が、日本での居住地選択やキャリア選択を行う際に大きく影響していたことが明らかになった。また、年代や通学学校種等により、生活実態に差異が生じていたこともわかった。

2.2　アイデンティティに関する研究

田中（2014a）は、サンフランシスコ・ベイエリアに居住する長期滞在の日本人にアイデンティティについて質問紙調査を行った。その結果、滞在が長期になればなるほど、民族アイデンティティの自覚が高まり、日本人アイデンティティが自身の拠り所であり、海外長期滞在には重要事項であることを明らかにした。

日本在住の日系ブラジル人青年三世と四世のエスニックアイデンティティの自己認識について、田中(2016)は、ブラジル人アイデンティティ、バイカルチャラルアイデンティティ、日本人アイデンティティの３つに分類できることを明らかにした。また、親子関係、他者の認識、ブラジルへの帰国経験と時期が、自己認識に影響していることがわかった。

田中（2018）は、日本の小・中学校に在学経験のある日系ブラジル人青年三世・四世10人に、小学校から現在に至る自身の民族アイデンティティの自己認識について聞き取り調査を実施した。その結果、「家庭における体験」、「学校における体験」、「職場における体験」、「帰国体験」の４つのカテゴリーが得られ、各カテゴリーの体験とエスニックアイデンティティの自己認識との関連について考察し、さらに「人と環境の適合」の視点から検討した。①家庭環境における親子の関係性構築の重要性、②学校環境の支配性および教師の影響力、③職場環境における周囲からのエスニックアイデンティティの一方的付与、④自発的な長期滞在の帰国では、自ら環境に働きかけ相互関係を構築する中でエスニックアイデンティティの自己認識が形成されることの４点が示された（田中，2018）。

日系人以外の外国人のアイデンティティ調査として、永井（2015）は、幼少時に親と共に来日し、日本で成人した新華僑二世のアイデンティティについて聞き取り調査により明らかにした。永井（2015）の研究から、中国語と日本語を流ちょうに話すことができ、中国と日本の二つの国の文化を客観視できると認識していることが明らかになった。また、調査対象者は中国と日本が融合した複合的なアイデンティティを持つことがわかった。併せて、自らのアイデンティティを強みと前向きに考え、日本社会で活かしたいと考えていることがわかった。

先行研究では、ライフヒストリー法を用いた研究、アメリカ在住の日系人や日本在住の日系人や外国人を調査した研究はあった。しかし、成人してから海外で15年以上長期滞在をした日本人のパーソナリティやアイデンティティの変化や異文化適応の過程、日本語・日本文化の継承等に焦点を当て、ライフヒストリー法を用いて調査している研究は、筆者の研究以外なかった。

3．研究目的

筆者が渡米した1985年は、現在と違い、インターネットが普及していない時代であったこともあり、サンフランシスコの日系人・日本人コミュニティと関わりを持つ機会が多くあった。1990年頃のサンフランシスコの日系人・日本人社会は、互いを助け合う、絆の強いコミュニティであった。

交流のあった長期滞在の日本人の多くは、アメリカ的であり、日本にいる同年代の日本人とは明らかに違っていた。しかし、多くの長期滞在の日本人は、

日本の文化を大切に保持しており、自分達を非常に日本的であると確信していた。そして、日本人であることに強い誇りを持っており、日本国籍を維持している。また、アメリカ国籍を取得した人でも、「私は日本人で、日系人ではない」と明言していた。筆者は、このような意識がなぜ起こるのか、海外長期生活が与える影響について、継続的に調査を行っている。

本研究は、2007年、2015年、2016年の調査の継続として行った。本調査は、３人のサンフランシスコ近郊に長期滞在している日本人男性へのライフストーリー・インタビューによって、海外長期生活によるパーソナリティ、アイデンティティや価値観の変化、異文化適応の過程や課題を調査対象者がどのように自覚しているのか等の長期滞在の課題等を調査し、自己形成やパーソナリティの変化に海外生活がどう影響しているのか、新一世の特徴や異文化適応の課題がどう変化しているのかを明らかにしていくことを目的とした。また、異文化適応をする過程で有効であった元来個人が持っていた資質には、どのようなものがあるのかを明らかにし、考察した。

４．研究方法

本研究では、2007年、2015年、2016年の調査に引き続き、自身の語りに焦点を当てることのできる質的研究の一つであるライフヒストリー法が、適切と判断し、使用した。ライフヒストリー法は、調査対象者が自分の気持ちや考えを自由に語ることができる会話を重視する研究方法で、語り手の思いや価値観等を明らかにできる。

桜井（2002）は、変動する社会構造の個人に照準している点は、ライフヒストリー法の特徴の一つであると述べている。海外長期滞在による異文化適応の課題、民族アイデンティティの自覚や変化、個人のパーソナリティの変容等を調査するためには、個人に焦点を当てることのできる質的研究方法の一つであるライフヒストリー法が適切である。

ライフヒストリー法は、シカゴ学派による移民研究「ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民」をその源泉としている（高井良,1994）。ライフストーリー研究は、研究者が個人へのインタビューを通して語り手の固有な個性的な経験を聞きながら、そのインタビューをもとに、抽象化や一般化の作業を経て、人々のアイデンティティのあり方や文化・社会現象を描き出すことである（桜井，2006，p 75）。

語り手が物語を育み、豊かに発展させるために、桜井（2006）は、調査者へ３つの戦略を示唆している。調査者のアイデンティティが語り手にとって語る物語を方向付けること、調査者の背景知を使うことで、語りを生産的なものにすること、調査者自身をインタビューに投入させることである。

本研究の調査者は、調査対象地であるサンフランシスコに22年滞在し、その後も新型コロナウイルス感染拡大のあった2021年と2022年を除き、毎年同地を訪問し、日系人・日本人社会との関わりを継続している。本研究の目的である異文化適応、アイデンティティやパーソナリティの変容の課題を明らかにするためには、当事者の語りに焦点を当て、背景知を熟知し使用することができ、インタビューに調査者自身を投入できるライフヒストリー法が最適と判断し、使用した。

本研究は、2007年の長期滞在の日本人女性５人の聞き取り調査、2015年の長期滞在の日本人男性の調査、2017年の長期滞在の日本人女性４人の調査の継続研究である。そのため、比較をする目的もあり、田中（2014b）と同様の手続き、研究手順、研究方法を使用した。

４．１　調査対象者

坂根次郎（仮名）40代は、大学卒業後1990年代後半に留学生として渡米し、現在は、コンピューター・グラフィックスの仕事をしている。妻と息子１人の３人家族である。

山藤智史（仮名）40代は、高等学校卒業後留学生として渡米し、美術大学を卒業した。現在の職業は、インダストリアル・デザイナーである。妻と息

子１人、娘１人の４人家族である。

阿部翔（仮名）40代後半は、高等学校卒業後留学生として渡米し、理系の大学を卒業し、物理学の博士号を取得した。大学教員、健康系の会社で勤務し、現在は高等学校の物理の教員免許を取得するために勉強中である。妻と息子１人、娘１人の４人家族である。

３人とも子ども達をサンフランシスコ学校区にあるJapanese Bilingual Bicultural Program（JBBP）日英バイリンガル・バイカルチャラル・プログラムに通学させている。

４.２　手続き

本研究では、（1）日本で少なくとも高等学校までの教育を受けている、（2）アメリカに15年以上在住している、（3）国際結婚をしているという3つの条件を満たす３人の長期滞在の日本人男性に聞き取り調査を行った。聞き取り調査は、2016年8月に実施した。データから書き起こした会話を文章化し、不明な点やいくつかのテーマに関しては、後日確認の聞き取り調査を行った。

検証は先行研究、筆者の先行研究である60代と40代の女性の聞き取り調査、60代の男性の調査結果と比較し、異文化適応過程の変容と課題について、その特徴を調査し、解釈した。

質問項目

ライフストーリーに関する質問項目が、本研究の目的と一致している山中・藤井（2002）の研究で使用された質問項目を参考に作成した。2007年、2015年、2016年の調査の継続調査であるため、同様の質問項目を使用した。

1．基本項目
2．社会移動
3．婚姻
　・結婚歴　・配偶者の職歴や民族的背景等
4．渡米について
　・理由、目的等
5．アメリカ人との関係
6．アメリカに来てよかったと思うこと
7．アメリカに来て後悔したこと
8．ライフストーリー
　・子ども時代から思春期の頃の思い出やエピソード
　・結婚と結婚生活の思い出やエピソード
　・アメリカに来てから現在までのエピソード
9．現在の生活状態
　・生活についての不満や要求
　・子どもとの関係について
10．民族関係についての意識
　・日系人についての意識
　・サンフランシスコの日系人について
　・アメリカ人との関係
　・他のマイノリティとの関係
11．その他、社会や宗教について
　・階層意識　・宗教　・アイデンティティ

４.３　分析方法

本研究のような個人の体験や価値観等の質的な変化を探る研究においては、ライフヒストリー法は有効であると考え、分析方法もライフヒストリー法に基づき行った。

なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

４.４　研究手順

1）研究の趣旨を説明し、調査対象者を募った。調査対象者に研究の趣旨とライフヒストリー法および倫理的な配慮の説明をし、研究参加への同意を得た。
2）先行研究で指摘されているライフヒストリーの要素を基に質問項目を作成した。
3）2016年8月に個人面接による聞き取り調査を実施した。
4）聞き取り調査後、録音した音声データから会話の内容を全て書き起こした。

5）2017年８月に書き起こした会話内容を調査対象者に確認してもらった。併せて、不明な点について、聞き取り調査を実施した。
6）調査対象者に内容を確認してもらった後に、質問事項に基づく会話の内容から、調査対象者自身の人生における重要事項を調査し、分析・考察した。

5. 結　果

本研究の調査対象者の３人の語りから、共通項目を中心に分類した結果、以下の４つの点が明らかになった。

5.1　渡米の経緯

３人とも留学生として渡米しているが、それぞれ異なる事情があった。阿部と山藤は、高等学校卒業後に英語学校へ留学した。阿部は、高等学校進学後も進路等について相談をしていた中学生の時の塾の英語の先生に、「アメリカに行くのもいいんじゃないか」と言われ、留学を決めた。最終的にアリゾナ州の大学へ転校し、物理学で博士号を取得している。

山藤は、高等学校３年生の進路を選択しなくてはいけない時期に、父親がワシントン州にある留学先である英語学校を勧めてきた。英語の堪能でない父親が探してきたこともあり、日本人経営の学校だったため、自分には学校が合わなかったそうである。高校生の時は、偏差値が低かったこともあり、大学進学は考えていなかった。渡米後、コミュニティ・カレッジから４年制大学へ編入できるシステムがあると知り、「ものすごい霧が晴れたような、道しるべができたような気がしたんですよ」と話してくれた。英語学校から、コミュニティ・カレッジへ転校し、最終的に４年制大学へ編入した。

坂根は、大阪の大学を卒業後、コンピューター・グラフィックに興味があり、留学を決意した。アメリカに来るという漠然とした感覚があり、英語への興味も強かった。ある企業から内定をもらっていたが、外国人との交流会で現在の妻と出会ったことが契機となり、渡米を決意した。コンピューター・グラフィックを勉強するために再び大学へ通学することになるため、当初両親は反対した。しかし、最終的には経済的な援助も含め、サポートしてくれた。「本当にそれはわがままですけど、人生の転機ではありましたね。本当にそこで多分来てなかったら、今の全部は全然ないと思います」と当時の自身の気持ちを語ってくれた。また、大学３年生の時に１年間休学し、オーストラリアでホームスティした経験が、留学を後押したとも語っていた。

5.2　国際結婚をした経緯

国際結婚に至った経緯はそれぞれであった。３人とも、縁があったのがたまたま外国人で、結婚することになったと話してくれた。

坂根は、日本で参加した外国人との交流会で、現在の妻である白人の女性と出会い、付き合っていた。共通の趣味が、バックパッキングであったことで、意気投合し、デートをするようになった。大学の夏休みの時、１ヶ月半ほど、一緒に旅行した。神戸からフェリーに乗って上海へ渡り、上海から南下して昆明まで行き、昆明から飛行機でタイへ入国し、最後はネパールを旅行した。行きたい場所が違うため、喧嘩ばかりの旅行だったそうであるが、互いのことをよく知ることができたという。その後、妻がアメリカへ帰国することになり、半年後に留学生として渡米した。渡米後に同居し、3、４年後に結婚した。特に結婚式や披露宴はしていない。

山藤は、英語学校で知り合った日系四世と結婚した。友人だった期間が長く、付き合い始めたのは、大学生最後の年だった。大学の卒業時に在留資格の問題があり、結婚した。渡米後長い期間女性のルームメイトがいる生活をしていたので、大きく生活が変化したとは感じなかったという。結婚式はしなかったが、日本の両親が結婚式や披露宴をしないことに納得しなかったので、結婚の半年後にアメリカで披露宴をした。

阿部は、サンフランシスコのコーヒーショップで、隣に座ったベトナム人の女性に声をかけ、交際する

ことになった。４年ほど交際して、結婚した。結婚式は教会で挙行し、日本からもベトナムからも親族や友人が祝福に駆け付けたそうである。特にベトナムからは参列者が多かったと言い、文化の違いを認識したという。

阿部は、付き合い始めた頃に、文化の違いを感じたことがあるという。「ベトナム人はもっと大らかで、いい加減なところが多いんで。例えば、今日は家族だけでディナーパーティーって言って、たまに100人ぐらいいる時もあれば。（中略）来る時間とかも全然違うし。例えば、ベトナムの結婚式というのは、インビテーション出して、実際に始まるのは２時間後」と文化の相違について、話してくれた。

５.３　友人関係の構築と在米生活

坂根は、「自分自身をアメリカの文化に寄らせていきたいなというところも。寄らせていくことによって、いろんな今まで会ったことがないような人とかに出会って、仕事なりにもプライベートなりにもネットワークを広げて、なんか新しいことができたらいいな」とアメリカ生活へ適応していきたい気持ちを語ってくれた。同時に、「日本寄りの生活も多分してきた」と話し、日本文化を保持していることが伺える。

また、坂根は、友人は日本人の方が多く、アメリカ人で親友と言えるのは、３人ぐらいだと話してくれた。「親友（心から信頼できる友）になろうとすると結構ハードルが高いのかなとは思います。でも、そういうのができたら一番理想だと思うけど、僕がそういう（アメリカ文化に）寄っていくというか、できればすごくいいなとは思いますね」とアメリカ人との友人関係構築の難しさを語ってくれた。

山藤は、「アメリカ人を理解するのに時間がかかってくる。やっぱりアジア人のほうが付き合いやすい。アジア人は国境を越えて連帯感がある。アジア人が集まると結構一緒に頑張ろうねという雰囲気が自然にできていた」と話し、アメリカ人との関係構築は難しいと感じていることが伺える。また、子どもが誕生してから、交友関係が子ども中心となり、パパ友やママ友、仕事関係の人が現在の友人の中心であると話してくれた。

阿部は、友人関係に特に問題はないという。妻がベトナム人であることから、ベトナム人の友人は多いという。また、大学院時代のクラスメートがほとんど白人であったため、アメリカ人の友人も多いという。「本当にもうアメリカン・カルチャーのほうにずっと入ってるんで、逆にたまに（会う）日本人との関係のほうが、大変です（と感じています）」と日本人との関係構築が難しいと感じていると話してくれた。アメリカで最初に就職した時、自分の担当の取引先が日本だったが、日本で就職した経験がなかったため、苦労したという。「日本での、特に社会人生活がなかったから、大変でした。アジアの製品をディストリビューションする係になったんで。一番大変だったのが日本との仕事の関わり（でした）。日本の独特のあの、会社文化が。特に初めはお互いに馴染むというか、お互いに慣れるのにちょっと時間がかかりました」と当時の状況を話してくれた。

アメリカ生活の良い点について、坂根は、母親が病気で余命宣告をされた時、休職せず、日本に長期間滞在でき、親孝行ができたことを例に挙げ、アメリカの家族優先の考え方やプライベートの生活が充実していることが気に入っていると話してくれた。「本当に自分の好きな仕事ができてることですね。で、生活的にというか、プライベートな生活もすごく充実している」と満足していることが伺える。

山藤は、大学進学の教育システムに満足している。「やっぱり社会の仕組みとして、アメリカのほうが優れていると思う。進学のシステム、エデュケーション・システムがいいと思う。仕事という意味でも、やっぱり仕組みが違うなって思う部分がいっぱいあります。チームの中ではすごい透明性とオープン性をものすごい大切にする、オープンなスピリットみたいなの」と話してくれた。

阿部は、「生活は面白いですね。というか、楽しいですね。みんな何をやるのも楽しんで生きてるという人が多いんで。それはとてもいいです。特にサン

フランシスコの生活は楽しいですね。色々おいしいものもあるし。クオリティー・オブ・ライフとしてはすごくいい、ちゃんと休みが取れる、夕方も家にそんなに遅くなく帰って来れる」とアメリカ生活の良さを語ってくれた。

アメリカに来て後悔していることとして、坂根は、「親のこと。長男でありながら日本にいない。親に孝行がちゃんとできにくい環境になってしまった」と日本にいる両親への思いを話してくれた。

また、心配なこととして、退職後のこと、父親の体調が崩れた時の心配を挙げていた。「日本の国籍がなくなるというのに、どっちかというと抵抗を感じているというか。その戸籍から抜けるという感じですかね。だから、そこで親との縁が切れるという、勝手に思っているところ、感覚がある」と両親との関係について語ってくれた。日本にいる両親に対する思いは、長期滞在の日本人に共通する悩みである。

山藤は、「あんまりないですね。ないからここまでいられる」と話し、英語がもっとうまく話せるようになりたい、老後の不安等の悩みがあるが、生活に満足していることがわかった。

阿部は、最初の４年ぐらいは、英語もよくわからず大変だったという。悩みとして健康を挙げていた。「定期的にチェックをし、胃カメラもしています。職業柄健康には気を使っているので、健康なものを食べるようにはしてます」と気を付けていることを話してくれた。

５．４　日本語と日本文化教育

子どもに対する日本語と日本文化教育も共通の課題であった。自身の家族と日本語で会話をしてほしい、つながってほしいという気持ちが強いようである。坂根と阿部は、子ども達を毎年夏休みに日本の学校へ数週間体験入学をさせている。

坂根は、子どもに対して自分とは日本語、妻とは英語というように、一人一言語の方法を実施している。「おやじは英語を全然話せないのもあるので、日本語教育、日本文化教育はしたい。日本人としてのアイデンティティもちゃんと持ってほしいなという希望もあった」と話してくれた。また、子どもには、「本当に概念にとらわれない、すごくボーダーフリーな考え方を持つ人間になってほしい。何が正しいとか、正しくないとかというのを本当に国を超えた感じ、感覚で考えられるような。もうその一つの国の概念にとらわれるわけではなく」と教育方針を話してくれた。

山藤は、「日本の名前だし、日本の漢字を付けているし、ミドルネームもないし。わざとないんです。いらないから。いつも日本語でしかしゃべらないし。洗脳するように、おまえは日本人だ、日本人だと言い聞かせているんですよ。日本語教育も自分のできうる限りの範囲で、ものすごく力を入れてます」と話し、日本語・日本文化教育を大切にしていることが伺える。坂根同様、一人一言語の方法を実施している。

阿部は、子ども達は、日本文化、ベトナム文化、アメリカ文化の３つの文化の中で生活していると話してくれた。「旅行とか結構好きなんで、色々なカルチャーを見せて、そういうマルタイカルチャーが（わかる）子どもに、理解のある子どもにしたい。去年の冬休みはインドネシアに行った」と話し、子ども達には、多様性のある人になってほしいと願っていることがわかった。また、「子どもに日本語でしかしゃべってないが、かえってくるのは英語。必要があれば（日本語で）しゃべれる」と子ども達の日本語能力について説明してくれた。

６．考　察

2007年、2015年、2016年の調査と比較し、以下の点が明らかになった。

６．１　渡米前から確立されていた自我と自己確立

調査対象者である３人の男性は、渡米前から自我があり、海外生活により自己が確立されていったことが明らかとなった。坂根と阿部は、英語や海外に憧れがあり、自分では気づいていなかった自我があっ

た。

坂根は、オーストラリアにホームスティするまでは、人見知りで、自分に自信が持てない性格であったと話してくれた。「オーストラリアでの経験で人生観が変わった。家族に180度変わったと言われた」とオーストラリアでの経験が強烈であり、自分に自信を持つことができるようになったことを話してくれた。オーストラリアのホームスティについて、「自分がリセットできた。誰も自分を知らない人ばっかりで、いろんな人種の人とも会えた。いろんな価値観も違う（のを）もう、新しく垣間見て、凝り固まった概念がオーストラリアでいろんな人に会ったりの中で、もう全部崩れた」と話し、大きな転機になったことが伺える。「ホームステイさせてくれてたGさんは、70歳だったけど、すっごいパワフル。ことあるごとに僕にハッパを掛ける。『もっと背筋を伸ばして歩け、明るく歩け』って。日記も毎日書かされて、日本食とかも絶対食べるなと言われた」と語り、学びの多かった滞在であったことがわかる。

山藤は、型にはめられるのが嫌いな性格であったことから、自分の考えを持っていたことがわかる。また、「典型的な田舎の少年。動物みたいな生活をしてました」と活動的だった幼い頃のことを話してくれた。留学後、アメリカの大学の進学システムを知り、偏差値で区別されず、自分のやる気で道が開けることを知り、活動的に加え、前向きな性格に変わったという。

阿部は、両親が戦中生まれなので、教育に熱心ではなかったという。そのため、自由な環境だったので、自分の好きなことができたという。「幼稚園の時は、やるのが遅くてというか、考えすぎる。この子はばかじゃないかと言われていました。小学校時代は、結構おとなしい、恥ずかしがり屋で。家で勉強、特に算数とかはパズルのように楽しくやってたんです。また、よく将棋をやってました」と語り、自分の好きなことやしたいことがはっきりしており、自身の意思をきちんと持っていたことがわかる。

6.2　自身のアイデンティティ

坂根は、「日本人としての民族意識がやっぱり強い」と民族アイデンティティを自覚していることを話してくれた。また、「アイデンティティは、あるがままというか、なすがまま、いろいろ縛られたくないというのは常にある」と話し、自己確立がされていることが伺える。

山藤は、「愛国主義者だから、日本がものすごい好き。アメリカ人になろうなんて思ったことは、一瞬たりともない」と語り、強い日本人としての民族アイデンティティを持っていることがわかる。また、自身のアイデンティティについて、「日本人、デザイナー」と話し、日本人であることが重要であることがわかる。

阿部は、「アイデンティティは、ウエスタン・カルチャーとジャパニーズ・カルチャーのいいところを合わせてると考えたい」と話し、日本人であることを大切にしながら、アメリカ文化へ適応していこうとしている意思が伺える。

また、「日本からすぐ来た日本人より日系人のほうが合います」と話し、仕事で日本人とうまくいかなかったことが影響していると思われる。日系人については、「すごくいい意味で尊敬します」と話してくれた。「今、日本町リトルフレンズ（日系の幼稚園）、うちの子が行っている所にしても、JBBPのローザ・パークスにしても（日本語）補習校にしても、アメリカでこんな日本の言葉、カルチャーが学べるなんてすごいじゃないですか」と語り、日系人の尽力によって学校のプログラムが継続していることを大切に思っており、自身の日本人としての文化を大事にしていることが伺える。

7．まとめ

本研究の聞き取り調査から、アメリカ合衆国で長期滞在している日本人の多くは、渡米前から自己確立をしており、自身の考えがあり、活動的であったことがわかった。アメリカ合衆国での生活を通し、それらがいい形で強調されていき、海外生活に適応

するパーソナリティが形成されていった。

併せて、次世代へ日本語と日本文化を継承していきたいという思い、日本人としての民族アイデンティティの意識の自覚等が、2007年、2015年、2016年の調査との共通点として明らかになった。しかし、日系人・日本人コミュニティとの関わりは、2007年と2015年の調査とは一致しなかった。子ども達をJBBPに通学させていることから、日系人・日本人コミュニティが大切であることは自覚している。しかし、2007年と2015年の調査で明らかになった「自分が他の日本人や日系人のために役に立ちたいという思いから、日系人･日本人コミュニティで活躍している」点は、一致しなかった。本調査の調査対象者が、40代で子育て中であるため、子ども中心の生活であり、ボランティア活動ができる余暇の時間があまりないことが影響していると考える。この点は、2016年の長期滞在の女性達の調査と一致している。

本研究から、60代と40代の世代間の共通点、日系人・日本人コミュニティとの関わり方の変化等の新一世の特徴の変容を見出すことができた。併せて、60代を調査した2007年と2015年の調査と比較すると、2016年の40代の調査と同様、3人の調査対象者の語りから、国際結婚をしてアメリカに滞在している日本人が増加していることが明らかになった。

これらの特徴が、日本人長期滞在者に共通する点であるのかを明らかにするために、今後も聞き取り調査を継続し、検証をしていきたい。

注）本論文は、2019年異文化間教育学会第40回大会での報告をもとに、再分析･考察したものである。

引用・参考文献

上田喜三郎（1997）．ハワイ日系人の生活史（28）太平洋学会誌　第76/77号　11-24，太平洋学会

カーク　スタンレー（2020）．A Japanese Canadian Teenage Exile: The Life History of Takeshi (Tak) Matsuba　言語と文化　24，3-36，甲南大学国際言語文化センター

加藤　ゆかり（2019）．群馬県大泉町における日系南米人のライフヒストリーと居住環境　地理空間　12（1），37-51，2019　地理空間学会

桜井厚（2006）．第２章　ライフストーリーの社会的文脈　能智正博・編〈語り〉と出会う　質的研究の新たな展開に向けて　3-116，ミネルヴァ書房

桜井厚（2002）．インタビューの社会学－ライフストーリーの聞き方　13-17，せりか書房

全米日系人博物館（2001）．日系アメリカ人の歴史―アメリカに渡った日系人の歩み―　全米日系人博物館

高井良健一（1994）．教職における中年期の危機－ライフヒストリー法を中心に－　東京大学教育学部紀要第34巻，323-331，東京大学

田中詩子（2018）．日本に居住する日系ブラジル人青年三世・四世のエスニックアイデンティティの自己認識　コミュニティ心理学研究、第21巻　第２号，153-168

田中詩子（2016）．日本に居住する日系ブラジル人青年三世・四世の体験とエスニックアイデンティティの自己認識との関連　人間文化創成科学論叢、第19巻，77-85，お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

田中真奈美（2022）．サンフランシスコ・新一世の異文化適応の課題－国際結婚をした日本人女性の事例からの考察－　総合人間科学　8，35-46　総合人科学研究学会

田中真奈美（2021）．サンフランシスコ・日系人の異文化適応の課題：ある長期滞在の日本人男性の語りから　東京未来大学紀要，15，111-119　東京未来大学

田中真奈美（2014a）．アメリカでの長期海外生活者のアイデンティティに対する重要性評価の分析：－アイデンティティ・アンケート調査から－　東京未来大学紀要，７，113-123　東京未来大学

田中真奈美（2014b）．　長期海外生活がパーソナリティに与える影響についての一考察－５人のアメリカ在住日本人女性のライフストーリーを通して－　比較文化研究，113，93-103　日本比較教育学会

永井智香子（2015）.「新華僑二世」のアイデンティティを探る　多文化関係学、12 巻、3-20，2015 多文化関係学会

村上　和賀子（2019）．ハワイ日系アメリカ人の生き方：ライフヒストリー聞き取り調査から　人文研紀要（92），83-109，中央大学人文科学研究所

山中速人・藤井桂子（2002）．フィールドワークとしてのライフヒストリー研究の展開と課題－カウアイ島（ハワイ）日系人のライフヒストリー調査プロジェクトを事例として－Journal of Policy Studies 67-90，関西学院大学

外務省　海外在留邦人数調査統計 https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/index.html（2022年８月31日）

（たなか　まなみ）

【受理日　2022年12月21日】